

令和 2 年 2 月 12 日

プレパンデミックワクチンの今後の備蓄の種類について（案）

厚生科学審議会感染症部会

1. プレパンデミックワクチンの備蓄の経緯

- 平成 9 年に世界で初めて香港において鳥インフルエンザ A (H5N1) ウイルスによる感染確定者が報告された。
- 病原性の高い H5N1 ウイルス由来の新型インフルエンザが発生した場合、その病原性の高さにより、大きな健康被害が引き起こされると想定されたことから、我が国では平成 18 年度から H5N1 プレパンデミックワクチンの備蓄を行っている。
- 備蓄するワクチン株については、第 19 回厚生科学審議会において、検討時点において「危機管理上の重要性（※ 1）」が高いワクチン株の備蓄を優先することとしている。
- 第 25 回厚生科学審議会感染症部会（平成 30 年 6 月）において、近年の鳥インフルエンザの発生状況等から、H7N9 株（A/Guangdong/17SF003/2016 (IDCDC-RG56N)）（※ 2）を備蓄することとした。

（※ 1）①人での感染事例が多いこと、②人での重症度が高いこと、③日本との往来が多い国や地域での感染事例が多いことの 3 つの観点から、総合的に評価し判断することとしている。

（※ 2）H7N9 鳥インフルエンザウイルスのうち、高病原性から低病原性まで広く交差性を示す特徴がある。

2. 令和元年度に備蓄すべきワクチン株について

- 平成 25 年以降における、H7N9 鳥インフルエンザウイルスの人への感染者数は、中国で 1,568 人となっており、このうち少なくとも 615 人の死亡事例が報告されていることから、人での重症度が高い。
- 過去 3 年間の世界における鳥インフルエンザウイルスへの感染症例については、H7N9 鳥インフルエンザウイルスが最も多い。
- さらに、中国は日本との往来が最も多い国である。
- 上記を踏まえ、現在確認されている亜型の中で H7N9 株（A/Guangdong/17SF003/2016 (IDCDC-RG56N)）が最も危機管理上の重要性が高いと考えられることから、以下のとおりとする。

1,000 万人分備蓄するプレパンデミックワクチンのワクチン株については、現在も H7N9 株が最も「危機管理上の重要性」が高いと考えられることから、令和元年度の備蓄株については、第 25 回厚生科学審議会感染症部会（平成 30 年 6 月）で承認された方針（H7N9 株（A/Guangdong/17SF003/2016 (IDCDC-RG56N)）の確保）を継続することとする。